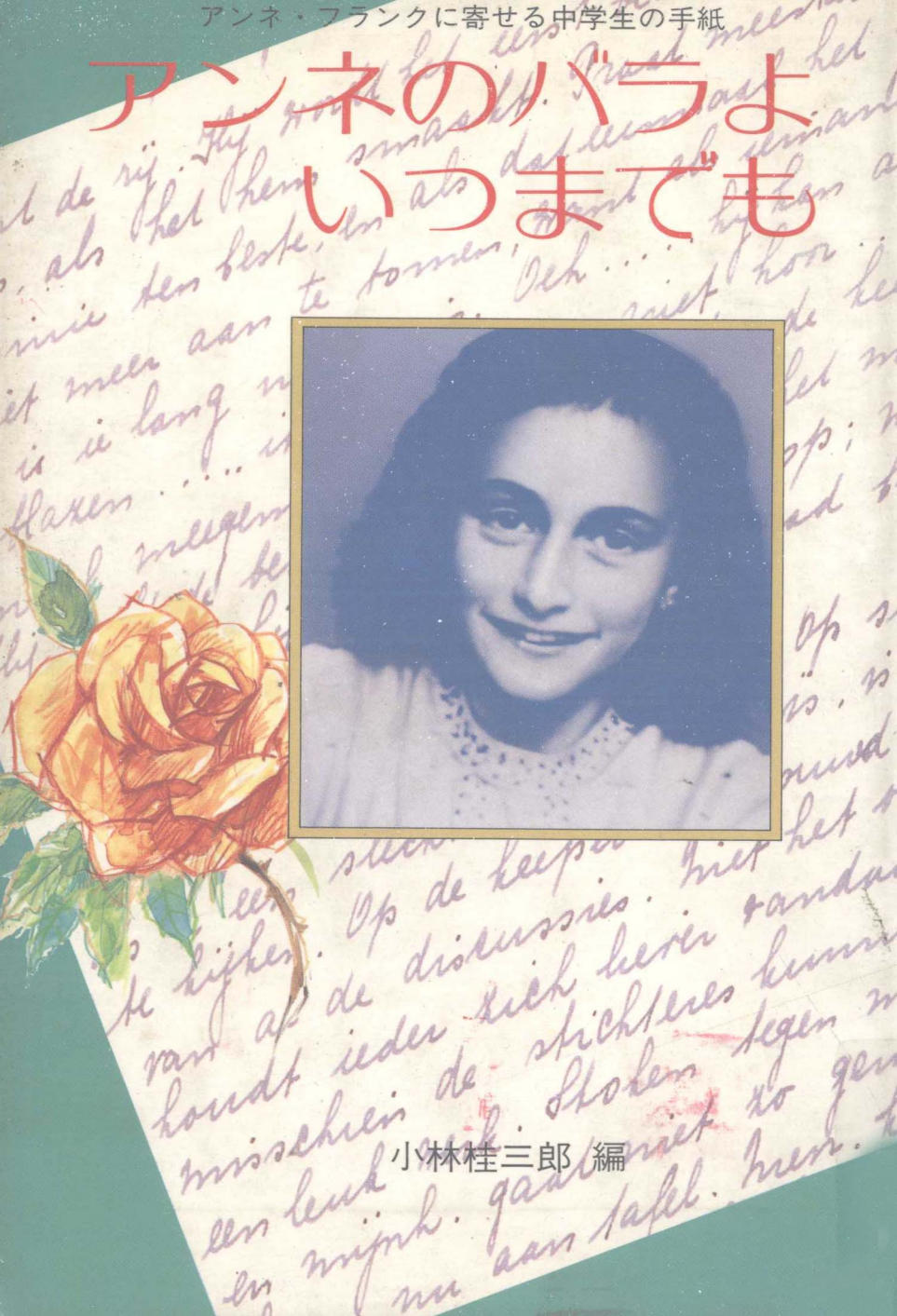
アンネ・フランクに寄せる中学生の手紙

アンネのバラよいつまでも



小林桂三郎 編

アンネのバラよいつまでも

小林桂三郎・編

小　学　館

■ 編者
小林桂三郎

■ 執筆者
アンネ・フランク　オットー・H・フランク　宮城まり子

■ 装丁・レイアウト
田辺　誠

■ 写真・協力
アンネ・フランク財団　聖イエス会アンネのバラの教会
田島　正　東京都杉並区立高井戸中学校

アンネのバラよいつまでも

1982年10月30日　初版第1刷発行

発行人　相賀徹夫
発行所　株式会社 小学館
東京都千代田区一ツ橋2—3—1（郵便番号 101）
☎（編集）東京03—230—5543（製作）東京03—230—5333
（販売）東京03—230—5739　振替／東京 8—200
印刷所　大日本印刷株式会社

NDC375 164P 194mm×139mm ©1982 SHOGAKUKAN Printed in Japan

＊製本には十分注意しておりますが，万一不良品がございましたら，お取りかえします。
＊本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となります。予め小社あて許諾を求めて下さい。

アンネ・フランク

もし、神さまが私を長生きさせて
くださるのなら、私は社会に出て、
人類のために働きたいのです。

オットー・H・フランク
スイス・バーゼル・ブーヘン通り12
1978年9月8日

親愛なる小林先生

つい、先週、アンネ・フランク財団のファン・デル・ワール氏から、東京都杉並区立高井戸中学校の皆さんが送ってくださったすばらしいアルバム「アンネのバラ ここに咲く」と、「アンネの日記」と「アンネのバラ」についての生徒の皆さんの感想文集二冊を頂きました。金色の折り鶴模様のついた美しいアルバムを手にした時の私の驚きは、ご想像もつかないことと思います。アルバムを開き、まずどのようにして「アンネのバラ」があなたの学校に送られたかを、非常な関心をもって読んだのです。初め都立農業試験場で育てられ、それから高井戸中学校に植えられたことなどを……。また、あなたの学校に植えられたバラについての、いろいろな新聞の記事を読んで、私は、このバラが、東京で、「アンネのバラ」として特に大きな関心を呼んでいること、そして、平和のシンボルとみなされていることを知りました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生徒の皆さんがバラの手入れをし、感想文を書くという形で、このバラが皆さんの生活の中で大きな役割を演じていることを私は理解いたします。先生、そして、生徒の皆さんが送ってくださったこのすばらしいプレゼントに、心からお礼申し上げます。私はこのプレゼントをいつまでも大事にしていきます。

朝日新聞社から、東京で行われた「アンネの日記」展の開会式に招かれていましたが、それに応じられず、非常に残念に思っております。もしも、東京に行っていたなら、あなたの中学校を訪問し、あなたと生徒の皆さんにお会いし、また、自分の目でバラを見ることができたでありましょうに。開会式の場で、「千羽鶴」をいただくことができませんでしたが、皆さんのお気持ちに感謝し、そして共に世界の平和を祈りたいと思います。

小林先生と皆さんのご健康を祈りつつ。　オットー・H・フランク

アンネのバラよいつまでも　／　目次

アンネのことば……1
オットー・H・フランクからの手紙……2
愛をこめて……宮城まり子　7
I　わが心の中に……15
強く生きるということ　岸野　仁美　16
賛美者のひとりとして　鈴木　千代子　23
今も生きつづけるあなたに　石本　雅博　29
親愛なるアンネへ　下山　名月　33
努力することの尊さを　谷村　弘子　40
人生の指標として　渡辺　力仁　44
あなたの心を刻(きざ)んで　西川　博美　47

アンネを理解するということ　高橋　泰子　52
永遠に輝く死　寺　真理恵　56
自分と比べて　桜井　俊　60

II　バラに託して……65

いつまでも見守って……　船橋　美紀　66
バラの精となって　堤　園美　69
すばらしい学校生活を　国田　力　72
バラへの誓い　杉山　伸子　77
アンネの死の尊さ　鈴木　彩子　81
バラに託して誓う　下村　定範　84
アンネの生涯に思う　根本　香　86
やさしい天使・アンネへ　斎藤　りえ　92
バラの教え　関口　とも子　94
明日をみつめて生きよう　江上　英一　97
平和と自由と形見のバラと　舛井　まさみ　100
アンネの心とバラをひきつぐために　福原　和夏　102

Ⅲ　平和への誓い ……105

永遠の平和のために　小林　美苗　106
若者の使命　渡部　剛　112
為政者(いせいしゃ)に　塘　亜紀　116
生き方を教えてくれたアンネ　橋本　三香子　119
あなたの分まで生きます　飯塚　克美　124
平和へ向かって　坪松　博之　129
明日への希望と努力　宮田　悦子　132
平和を作り出す努力を　上形　曜子　137
世界が一つになる日を　菅野　亨　141
戦争をしてはいけない　梅沢　あとみ　144
戦争の悲しみを忘れないで　小沢　悦　146
編者あとがき――アンネのバラよいつまでも――……小林桂三郎　150

愛をこめて

宮城まり子

アンネの住んだという家に、大人になりかけのちょっと困った日本人のらくがきがいっぱいあるとききました。でも、それは、アンネの日記がたくさんの人に読まれ、愛されているからでしょう。

勇気ある、やさしいアンネが、日本の子どもの愛する少女であってほしいと思うのだけれど、私は、アンネがアイドルになることを、とても恐れます。アイドルではないありったけの人生を、最も恐ろしい、人間としての極限状態にありながら、やさしく生きることのできた少女を、私達は、忘れてはならないことだと思うからです。ただ、ユダヤ人であるということだけで、アンネは、耐えられな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い苦しみをあじわったのです。

アンネの日記を読むたびに、私は、現ポーランド領に生まれた、クリストフ・エッシェンバッハという、ピアニストであり、指揮者を思い出します。クリストフは、今、スイスのチューリッヒのオーケストラの、常任指揮者です。彼が、この五月にチューリッヒの湖のほとりのレストランで私に話をしてくれたことが私の心に重なります。彼は、二歳でお母さんを、四歳でお父さんを戦争で失ない、収容所に入れられました。幸い、すぐ戦争が終わり、四歳の彼は、ピアノ教師でもある、やさしい心を持った西ドイツの婦人にひきとられ、養子になりました。そして、八歳からピアノを習いはじめたのです。

話をしている間、太陽の光に、彼のほほに、すーっとついている、きえそうできえない長いきずあとがあることに気がつきました。十七歳で、ミュンヘン国立音楽コンクールで特別賞を受賞して、ずっとピアニストとして活躍しています。そして、戦争が終わって、三七年、彼は四十一歳、スイスの大きなオーケストラ

の、常任指揮者です。そして、私は、この間彼から新しいレコードをもらいました。クリストフさんと、西ドイツのカール・カルステンス大統領と、フランツさんというピアニストの、三人のピアノ曲です。

それは、アムネスティ・インターナショナルという、政治犯釈放運動のための基金集めのレコードです。

私は、スイスで、彼の指揮する交響楽団をききました。百人をこすオーケストラの団員の中には、ウィーンの人、ドイツの人、フランスの人、スイスの人といるでしょう。彼のタクトのもとに、ストラビンスキーの〝犠牲〟が演奏された時、私は、戦火の中を、泣き泣きふるえていたであろう四歳の私のクリストフと、私のアンネとだぶります。

アンネは、もう少し年上で死んでしまったけれど、年が小さかったので生きたクリストフ、屋根裏に、農家の穀物小屋に、そして収容所に生きたピアニストは、オーケストラの指揮者になり、彼を、苦しめたであろう国のミュージシャン

の指揮をしているのです。ストラビンスキーの〝犠牲〟を、スイス（永世中立国）できく私は、アンネを思い出させました。限りなくやさしい、そして勇気ある才能ある人だと思いました。その指先にある、一本のタクトから、美しく悲しい音楽がきこえました。はげしいティンパニーを指揮する時、殺されに行く人々をみました。アンネが生きていたら、今、どんな生きかたをしているでしょう。きっと、すばらしい生き方をしていると信じます。

もう、あのような狂気の殺人はいやです。あってはならないのです。でも、いつも、どこかでその争いがたえません。何故……？そう私は思います。そして、この原稿を書いている間にも、ブルガリアの首都ソフィアで、ジプシーといわれる子をみました。国をあげての子どもの集会、音楽、絵画、化学、スポーツ、文学と、すぐれた才能を持つ子どもが、世界から集まっています。ねむの木学園の、絵をかく少年三人を参加させた私は、ほんのひととき、町のベンチで、アイスクリームを食べました。参加している子どもの、いきいきして楽しいこと。その中

で、じっと、私をみている二人の男の子をみつけました。あまりにも貧しい、よどれた少年でした。「いらっしゃい」いくつかおぼえたブルガリア語でいいました。大きな目は、じっと見開かれ、私のそばに来てくれました。きっと、旅人にお金をほしがるこじきの子か、かっぱらうどろぼうの子と思ったのでしょう。私を守ってくれている通訳の人が、さっとそばに来ました。私は、その子を抱きました。私に抱かれてその子は、じっとしてました。友達がよって来ました。二人、三人。私は、一人ひとりの頭の毛をとかしてあげました。なんにもあげませんでした。あげたくなかったのです。もらうために来たのではないと願ったのです。元気に着かざった子の中を、ジプシーの子は、手をふってスキップして行きました。その夜、ねむの木学園の子どもが、私に、日記をみせました。「まり子さんが、抱いた時、あの子の汚れたシャツが、おかあさん（私）のきれいな着物とぴったりくっついていた時、僕は、うれしくてきれいだった。あの子、きっと、うれしかったのね。」私は、そんな自信は持ちません。でも、あの子がほおえんで

13　愛をこめて

スキップしていった姿が、うれしかったのです。通訳の人がいいました。「あれ、ジプシー」あきらかに差別がありました。

今、アンネはいません。でも、わけもなく差別され、一人で泣く子が、別の形でいるでしょう。この本の中に集められた、感性豊かな中学生達は、アンネを通して、人が人として、尊び、人権を重んじ、共に生き、きちんと生活できるよう願っていることでしょう。

集会に世界から、集まった才能ある子、そして、ジプシーと自国の人から、差別された子、そして、クリストフ・エッシェンバッハ、そして、アンネ・フランク、この本を読むあなた、書いたあなた、世界中に、たくさんの人間が、生きているんですね。子どもたちのかぎりない才能と感性を信じ、その愛をこめて。

（ねむの木養護学校々長・女優）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com